

WPI プログラムの将来構想 (私案)

これまでの WPI プログラム全体の成果と改善すべき点について

東京大学 K-IPMU・PO 三田 一郎

プログラム委員会の結論：世界最高レベルの研究水準；開かれた国際的研究センターの設立；融合研究；研究組織の改革に成功してWPIのミッションを果たしたと評価。

ここではWPIのPOとして、我が国の研究体制について見てきたことを述べる。

○ 我が国の研究組織全体の改革

言うまでもなく、WPIを通して我が国の研究組織の改革が前進した。今後さらに努力していく必要があるところを述べる。一番大事なのは我が国の大学では学長がリーダーシップを出せるところが限られていることだ。世界最高レベルの研究所をつくるにはリーダーシップが欠かせない。米国での Stanford 大学と Rockefeller 大学の例を述べる。

- DOE が Stanford Linear Accelerator Laboratory を造り、スタンフォード大学にその運営を託した。スタンフォード大学はポストを 30 出した。土地は東京ドーム 10 個分を DOE にリースした。このプロジェクトはスタンフォードの学長がリーダーシップをとった。結果 1962 年から素粒子実験で 3 つのノーベル賞。
- ロックフェラー大学では学長がポストを各研究グループに配分する。
- 東京大学の場合 7 年間議論して 9 ポスト。拠点として将来計画をたてられない。文科省がテニユアポストとして 5 ポスト用意してくださったことに感謝する。
- 我が国の研究組織の改革として、例えば教員の定年後ポストは学長に戻すのはいかがか。
- WPI が成功と評価された一つの理由として、きめ細かな評価体制であった。我が国の研究組織の改革として今後、科研費の終了後の評価を、採択するための評価と同じぐらい力を入れたらいかがか。

○ 評価体制について

- 大きな共同研究を通して研究拠点を評価する場合「この拠点が無かったらこの結果は得られたか」をベースに評価する事が重要だ。プロジェクトの発案者、スポンサーなどがどれほど拠点に関わっているか。拠点の研究者がどれだけ発見に寄与したかを理解した上で拠点を評価する。

○ 補助金支援期間終了後の支援

- 終了後にはホスト機関がフルにサポートすると約束した。しかしながら、ポスト・予算の削減は防げられないであろう。国からのサポートがなければこれまでにつぎ込んだ資金が無駄になる可能性もある。
- ホスト機関の拠点運営を暖かく見守る必要がある。

○ 新拠点について

- 融合は強くエンカレジすべきである。縦割研究体制の時代は終わった。
- 行政指導での枠を超えた研究組織の改革の一つとして、新規拠点候補となるホスト大学の学長のリーダーシップを審査するのはどうか。